



2007年(平成19年)
9月号(No. 748)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●http://www.jac.or.jp

e-mail●jac-room@jac.or.jp

日本山岳会への提言

最近の遭難と登山者の自立

黒川 恵

中高年の登山ブームとともに最近の遭難は、一般登山道での不注意による事故が増えるなど様変わりしている。指導委員会委員長である黒川恵氏に、日本山岳会会員の登山者としてのあり方を綴ってもらった。

昨年中の山岳遭難の状況

夏山シーズンを前に、7月5日から2日間、富山市で「全国山岳遭難対策協議会」(第44回)が開催された。この協議会は、文部科学省や警察庁などが主催するもので、各都道府県の山岳関係者や警察、消防などから、約2000名が参加した。その主な内容を報告しよう。

過去最悪の状況

警察庁がまとめた平成18年中の山岳遭難発生状況は、発生件数1417件、遭難者数1853人、死者・行方不明者278人である。これは、発生件数、遭難者ともに、昭和36年以降、過去最高を示した。10年前の平成9年中と比較すると、発生件数で602件、遭難者数で

目次

日本山岳会への提言	
最近の遭難と登山者の自立……1	
東西南北……4	
西堀栄三郎さんを偲ぶ、カカニの丘の記念碑	
『山ありて人あり』と川崎吉蔵	
支部だより……6	
福井	
活動報告……7	
広報委員会/医療・海外・指導委員会	
会/山研運営委員会内 ミニ水力発電小委員会/三水会	
図書紹介……10	
図書受入報告……12	
ルーム日誌……13	
会員異動……13	
INFORMATION……14	
さんけん通信……15	

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10~20時
水・金……13~20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10~18時

892人と、死者・行方不明者は81人と、いずれも増加している。発生件数と遭難者数は倍増以上となっているが、死者・行方不明者数が4割増でとどまっているのは、深刻な状況に至る前に救助されているからだ。それだけ救助技術が高まっていると考えられるのではないだろうか。

滑落が286人(15・4割)、転倒が204人(11・0割)となっており、全体の65割近くをしめている。これら事故の大半が、いわゆる一般登山道か、そこから迷い込んだ山中で起きているとすれば(実際もそうだろう)、もはや不注意による自損事故と言わざるを得ない。

単独登山者の遭難では四分の一が深刻な結果

遭難者の年齢別では、60歳~64歳が最多で292人、40歳以上の中高年登山者が全遭難者の81・3割、実に1507人となっている。20代と30代では267人だから圧倒的に中高年者の事故が多いということだ。

態様別ワースト3
道迷いが714人(38・5割)、

単独行での遭難者は497人で、全遭難者数の26・8割であり、そのうち死者・行方不明者は129人となっている。これは、全単独登山者の遭難者数の26割にあたる。全遭難者における死者・行方不明者の割合は15割であるから、単独行の場合の割合は約1・7倍と高くなっている。「単独行よりツアー

登山」といった標語が叫ばれるようにもなりかねない。実際、救助現場では単独行者の捜索には難渋するのである。

4割以上の遭難者が、遭難現場から直接救助要請

全遭難者の43・9割が遭難現場から通信手段を用いて救助要請している。携帯電話の普及によって、携帯電話による救助要請が増加することが予想されるが、通話エリア内では有効であつても、多くの山岳地帯では通話エリアが限られているのが現状である。予備バッテリーの持参や要所での事前感度チェック、低温などによる機能低下についても充分注意が必要だ。

近年の山岳遭難の傾向

かつては、岩場での落石や転落、冬山での雪崩や行方不明が山岳遭難の代名詞だった。「そんな危険なところへ行くんじゃないよ。山岳部なんかぜったいダメだ」と親に釘を刺されて山登りを断念してきた世代が、いま中高年になつて、憧れの日本アルプスをめざしているのかもしれない。一般登山道で浮き石や濡れた木の根を踏んだり、雪渓でルートを失ったり、道迷い

のあけく転落して命を落としていくのが、最近の傾向のようだ。

体力や技術不足、気象判断の誤り、装備の不備など、登山の基本知識を欠いた遭難が多い。それらが前述のワースト3につながっている。中高年登山者の増加が遭難の態様を変化させているとも言えるだろう。

山を楽しむために

登山は、「計画、実行、記録、反省」から成り立ち、反省の結果、示された課題には対策をもつてある。「山を楽しむ」ことの最低条件は安全の確保にある。企画立案の段階から実行段階を通じてそのことが一貫されていなければならぬ。

登山は「スポーツ」だ。背中に赤ん坊くらいの重荷を背負つて1日何時間も歩きつづけることは相当の負担である。たとえ日帰りハイキングとはいえ1リットルの水と食べ物、雨具などをザックに納めれば5キほどにはなる。このように、1日中継続するスポーツは登山をおいて他にはないだろう。そのことを思えば、安直に山に入ることではできないはずだ。しかし、近年の山岳遭難で最も多い原因は、前



最近、遭難者の多くがヘリで救出されるようになった。北ア・燕山荘で

述のとおり不注意によるもの。どんなに低い山でも自動車道がなければ「山」には救急車が入ってこない。ヘリコプターも万能ではない。結局頼れるのは自分自身なのだ。昔から「ケガと弁当は自分もち」と言われてきたが、それが自然の中に身を置くときの大原則である。

とにかく「安全なくして、楽しみなし」であり、楽しむためには、事前学習が不可欠ではないかと思う。そして万一のために「セルフ・レスキュー」の知識をもつことが、これからの登山者としての常識となつてゆくだろう。

本会指導委員会の試み 公益活動について

委員会活動の一環として私たちが指導委員会も、かつては会員に向けて山での救急法や雪崩講習会、アイスクライミング講習会など多岐にわたつて行なってきた。山岳遭難実態調査も2年間実施し、それなりのデータ収集ができたが、その後、個人情報保護などの関係で残念ながら今は行なっていない。人気のあるイベントには多くの参加者があるものの、全般的に講習内容が硬派で宣伝も下手なせいか、満員御礼というわけではなかった。日本山岳会の多くの会員は、さまざまな所で山岳に関する学びの場を得ることができ、人が多いため、委員会として気軽に講習することなどは少なくなっているのかもしれない、などと思つたりもしている。

しかし、数年前に上高地から焼岳登山を山の救急法講習をからめて実施したことがある。そのときに参加した会員の方から、「君たち、こういった役立つ講習会なら、各支部を回つてやったらどうだ」と励まされ、うれしかったことがあ



医療委員会と共催で行なわれた救急救命法の講習会

近年は、公益社団法人としての自覚を高め、さらなる実績を積み上げてはならない。実は経費分担の理由もあるのだが、医療委員会や海外委員会とも協力しながら広く一般に向けても、救急救命法や突然死問題、辺境医療、公募登山シンポジウムなどを開催してきている。昨年は、スキーチューンナップ専門店にも協力してもらい、座学から雪山での実地講習まで行なったが、それには、のべ100人ほどが参加してくれた。医療委員会との共催講習会でも会員ではない人たちの参加も多く、対外的公益活動としては多少の成果をあげることができただろうと指

導委員会内部では自負している。

公益法人の認定に関する法律がある以上、日本山岳会としても公益活動の重要性が問われるところへさしかかっているのではないかなと思っています。

山岳救助隊と登山者の出会い

前述の全国山岳遭難対策協議会では各県警救助隊の方々と懇談する機会が多い。7月の富山でも、最近の山スキーやスノーボードの多発事故が話題になった。遭難者の多くは、「まさか、自分が……」と思うものであり、救助隊と遭難者は、当たり前のことだが、事故が発生してから出会うのが普通だ。

一般登山者にとっては、山岳救助隊の活動や救助現場を目の当たりにすることはめったにない。とくに山岳団体に加入していない未組織登山者やスノーボーダーにとっては救助隊の実際を知らない人のほうが多いだろう。

指導委員会では、20代から30代にかけての山スキーヤーやスノーボーダーに声をかけて、前述のように昨年度からは継続的な講習会を実施している。救急救命法や雪崩対策の机上講習からスタートして実地の雪山講習までを段階的に

進める方法である。リーダーシップとメンバーシップについても学習してもらうようにもしている。

対外的公益活動の一環として、こうした日本山岳会会員以外の人たちを対象として、11月には、長野県警山岳救助隊の隊長から講義を受ける計画をもっている。実際に救助現場で隊員がどういう判断を下し、どのように行動をするのかを知ってもらうことが主眼である。この一連の企画は、受講者にはなかなか好評のようである。そうして、受講された人たちが本会入会を決定してくれたらまさに一石二鳥である。

自立した登山者へ

いま、登山界は、山岳会や山岳部で体系的に登山を学ぶシステムが、崩れているように感じてならない。リーダーのもとで主体的に登山行動するのではなく、引率者にしがたつてついてゆく形態が幅を利かせているのではないだろうか。山には信号機がないから、行くのも止まるのも、本来は登山者自身が決めなくてはならない。しかし引率者という信号機により、自らの危険予知能力ともいえる、

信号機能がどんどん低下してしまっているに違いない。

そういった信号機能低下登山者ばかりが増殖してしまったら、日本の登山文化は死滅してしまう、と心底思うのである。たとえば、ツアー登山であろうと公募登山隊であろうと、登山は、自らの意思と技術と体力で行なうスポーツなのだ、ということをいつも肝に銘じていることが必要だ。それが、自立した登山者として欠くべからざる気骨である、と言ってもよいのではないだろうか。

ネパール 三つの峠越え
レンジョラ〜チョララ〜コンマラ24日間
11/2 発 ¥457,000

ケンプの代表的な3つの峠を越えるロングトレッキング。ターメ谷からレンジョラ5340mを越えゴークヒーク登山。チョララ5330mを越えカラパタル登山。コンマラ5535mを越えチュクンへ。

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

N 東 西 南 北 S

西堀栄三郎さんを偲ぶ、 カカニの丘の記念碑

宮原 巍

西堀栄三郎さんは生前、クリシユナ・バハドゥール・パルマ氏に依頼してカカニの丘に土地を求め、ボリヴィラと名付けた小さな家を建ててもらったことがあった。そのクリシユナさんは、今は故人であるが、西堀さんが、1952年2月、戦後初めての日本人としてネパールを訪れて、マナスルの登山許可を受けた際に大変世話になった恩人であった。

西堀さんが亡くなられた後、ご子息の岳夫さんから、その建物の利用についての相談を受けた。しかし建物はずでに使用に耐えるような状況になく、維持するのも困難な状態であった。そこで、いつ

そのこと整地をしておし、そこを小さいながらも西堀さんのためのメモリアル公園にしてはどうかということで話がまとまった。

当初、「西堀栄三郎生誕100年」を記念して建設する予定であったが、諸般の事情から建設が数年遅れ、たまたまマナスル登頂50周年に合わせてその完成をみた。06年12月12日、西堀家の方々、平山善吉・前会長はじめ会員十数名、日本大使館関係者、カトマンズ在住日本人、クリシユナさんの家族、ネパール山岳協会関係者と村人が集まって盛大に除幕式が行なわれた。

建設資金は、岳夫さんの強い意向で、西堀家だけでまかなわれた。私は、その建設依頼を受けて、カトマンズの採石場で石を調達し、現地に搬入し、碑面の彫刻はカトマンズの石工に依頼した。

記念碑からは、マナスルをはじめ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）



除幕式が行なわれたカカニの丘の記念碑の前で

め、ガネッシユ、ランタン、ジュガールヒマラヤ、そして遠くガウリシャンカールまでが一望のもとに眺められ、その建設の手伝いができたことは、私にとっても大変光栄なことであった。

今は知る人も少なくなってしまうが、西堀さんが、日本とネパールとの友好関係を築かれる上で最も貢献のあった日本人として記憶されてもよいのではないかと思う。日本人による8000メートル峰マナスル初登頂の契機をもたらしたその功績は計り知れない。マナスル登頂は、その後の日本の登山界だけでなく、当時の日本人の心に勇気とエトスを与えた。そのこと

を、私たちは忘れてはならない。どうか、会員の皆さんがネパールを訪れた際には、ぜひその記念碑を訪れてほしい。記念碑はカカニの峠から、さらに2キロほど先にあるラニボワン村の村はずれに建っている。

『山ありて人あり』と川崎吉蔵

松田雄一

『山ありて人あり』は、山と溪谷社の創業者、川崎吉蔵の創業の志と二代目吉光社長退任までの歴史をまとめたものである。非売品で、さる4月20日開催の「川崎吉光さんの感謝と慰労の会」の当日、出席者に配布されている。作家の井ノ部康之氏が著わしたものである。当初は、山と溪谷社の創立70周年記念出版として、既刊の『目で見る日本登山史』などと合わせて企画されたが、諸般の事情により発行が遅れていたものである。

創刊から終戦まで

ひと口に社史といっても、喜寿を迎えた山と溪谷社である。本邦初の日本山岳会が誕生してから25



2006年12月
山と溪谷社刊
四六判 440頁
非売品

年経ち、登山も、大学(高専)山岳部による積雪期スキー登山、ロッククライミングからハイキングまで、漸く裾野が広がり始めた昭和5年、登山の専門誌として創刊された『山と溪谷』の物語である。当時は登山の商業雑誌としての可能性は未知数で、まったくのパイオニア・ワークであった。田部重治氏の著書『山と溪谷』の書名を誌名にいただいて発足した『山と溪谷』の創刊号は好評であった。創刊号には以下のような記述がある。

創刊号に「信条」と題して掲載された「巻頭言」は、山と溪谷社の創立の精神でもあり、編集のモットーとして掲げた「何事も第一流をねらうこと」、そして雑誌存続の基盤とした「広告重視」は、それ以後の『山と溪谷』を支える太い二本の柱となった。

しかし2号、3号と軌道に乗るまでの苦労は並大抵のものではな

かった。後を追って競合誌も出てきたが、多彩な執筆陣にも恵まれ順調に推移した。しかし、10年後には軍部による統制時代になり、最後には『山とスキー』一誌に統合されたが、終戦前後の一時を除き『山と溪谷』は、孤塁を守り続けた。本書は、この創刊から終戦までの間に全440ページの半分を費やし、第一章「胎動」から、第二章「黎明」、第三章「奮闘」、第四章「雌伏」と、四章に分けて詳述されている。

この間の登山史は『日本山岳会百年史』で最も苦労した部分であり、本書が先に出ていれば、参考になることが多かった。とくに川崎吉蔵社長の創立の理念(読者である登山者に愛される誌面作り)と軌道に乗るまでの努力には多くの感銘を受けた。

戦後の復活からマナスル登頂まで 昭和21年1月には、会社を再建し、『山と溪谷』85号が復刊された。また購読者のために山溪俱樂部が創設された。昭和22年には、実兄の隆章氏が編集長に就任し、初期の社風である「勤勉・節約・家族的」を旨とし、『ハイカー』『岩と雪』も創刊され、社業は順調に推

移した。この間の経緯は、五章「復活」、六章「再興」として100ページをさいて述べられている。マナスルの初登頂による登山ブームを追いつきに社業も拡大され、昭和34年末には、社屋も平河町の中政連ビルに移転した。

躍進と安定

創刊30周年を迎えた昭和35年には、『山溪山岳賞』を創設し、登山界に貢献した登山家を顕彰する制度を設けた。昭和37年には川崎隆章氏が定年退職したが、昭和35年に休刊した『岩と雪』と裏腹に海外登山が盛んになり、昭和39年には東京オリンピックを前に海外旅行が自由化され、一気に海外登山の全盛期が訪れた。昭和45年には日本人によるエヴェレスト登頂も成功し、日本の登山界も安定期を迎えていた。山と溪谷社も創立40周年を迎え、『山と溪谷』『岩と雪』『ハイカー』の三本柱も安定した。それぞれの編集長も4年1期を通過として交替していき、新陳代謝を図ることができた。

40周年記念事業としては、懸案だった『世界山岳百科事典』を発刊し、さらに昭和46年7月には、港区芝大門の新社屋に移転した。

移転後の10年間は売り上げが好調で、『山と溪谷』本誌の売り上げが10年間に4倍に達する程であった。新生・川崎吉光の時代

昭和51年10月には川崎吉蔵社長が退任して、代表権のない会長に退き、長男の吉光氏が二代目社長に就任した。

昭和52年8月24日、川崎吉蔵会長急逝。以後30年、吉光社長時代が続くが、昭和53年頃から読者の本離れと販売店舗の大型化がすみ、出版界の不況が続くようになる。山と溪谷社も世代が改まり、若手編集者の懸命な努力も空しく、本社も芝大門の地を離れ、港区赤坂の三倉ビルに移転し、創設75周年を期しての新しいスタートを迎えることになった。

なお本書は、著者の長期にわたる関係者からの取材をもとに編集されており、『登山専門誌の側面から見た登山史』として、貴重な文献でもある。100周年を迎えた日本山岳会とはまた異質な登山史になっている。

*

部数に限りがあるが、本会会員にかぎり、事務局に申し込めば、特別価格3000円で購入できる。

支部



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

福井支部

日本真ん中五支部懇親山行

日本山岳会は28支部となった。
各支部で、さまざまな活動を行なっ
ている。

福井支部は1991年に創立。

翌年6月、岐阜、京都、富山、石
川の4支部の参加を得て、初の懇
親会を開催した。場所は、福井県
最高峰・経ヶ岳の山麓にある「六
呂師高原ハイランドホテル」であ
った。翌日、経ヶ岳に記念山行を
した。これを契機に、北陸三支部
持ち回りで山行を開催し、懇親を
深めた。その後、京都、岐阜支部
が加わり、5支部となった。

この懇親山行に、会長や副会長
(支部担当)が参加してくだされば、
地方の会員との交流は深まり、経
費の節減にもなり、本部役員に対
する地方会員の理解度にも繋がる
との思いから、宮下会長に07年5

月発行の福井支部報を送付し、参
加をお願いした。

7月21日・22日、「第7回日本真
ん中五支部懇親山行」を宮下秀樹
会長と神崎忠男副会長(支部担当)
をお招きし、福井支部担当で開催
した。

21日は、南越前町花はす温泉「そ
まやま」で花はす観賞と懇親会を
行なった。16時ごろから参加者が



仙山山頂で宮下会長を囲み記念撮影

——リーダーの必読書——

最新刊

北アルプス 大日岳の事故と事件

斎藤惇生 編/A5判/190頁/1995円

大日岳の雪庇崩落事故がなぜ事件になったのか。少壮気鋭の弁護士
が事件の核心に迫り、雪氷学研究の権威が巨大雪庇の構造を世界に
先がけて明らかにした。雪山のリーダーにとって必読の書である。
(梅棹忠夫氏 推薦!)

最新刊

——樹林の山旅が楽しめる奥美濃——

三訂 奥 美 濃

——ヤブ山登山のすすめ——

高木泰夫 著/四六判/244頁/1890円

——五百澤智也山岳図集——

山と氷河の図譜

五百澤智也 著/B5判/144頁/2940円

カラー63点、2色刷33点、モノクロ33点、計129点の作品を掲載

ジュンク堂書店池袋店7Fにて

「山と氷河の図譜」展

10月1日から31日まで開催中

〒606-8161京都市左京区
一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版

Tel. 075-723-0111
Fax. 075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]

集まり、ロビーで会長を交えて懇
談。はすまつりで大勢の人が行き
かう中でも和やかだ。

17時30分、会長による「ヒマラ
ヤ初期の講話」が、ユーモアを交
えて行なわれた。18時、南越前町
長・増澤善和氏が町の歴史と観光
を紹介しながら、歓迎の挨拶をし
た。その後、集合写真を撮り、高
木崎男名誉会員の乾杯で宴会が始
まった。はす会席の料理と美味し
いお酒で、時間を忘れるほど盛り
上がった。

会長・副会長の席の周りには多
くの会員が集まり、懇談に花を咲

かせていた。地方の会員との交流
という目的を達することができ、
世話役として感慨深いものがあつ
た。各支部から差し入れの美酒に
ほろ酔いとなり、続く二次会も盛
り上がった。

翌日は仙山へ登り、懇親を深め
た。国指定の南北朝時代の史跡・
仙山の頂で記念写真を撮り、下山
温泉で汗を流し、花はすを観賞し、
ながれ解散とした。

(宮本数男)



広報委員会

第3回広報連絡会

さる7月14日、広報委員会主催の広報連絡会が、日本山岳会104会議室で開催された。広報委員会は、高齢化が著しい日本の登山界の問題点や情報などを、メディアの山岳担当記者と共有し、情報交換を図ることを目的に発足した委員会である。今回は、宮下秀樹会長による新体制のもと、その抱負を語ってもらうことを主目的とした3回目の広報連絡会となった。

まず鰐坂青青副会長から開会の挨拶があり、続いて宮下会長より新会長としての抱負が語られた。少子高齢化の時代にあつて、若い人に魅力ある山岳会にするにはどうしたらよいか、とても難しいことだが、緊急の課題として取り組んでいく決意が語られた。また「中央分水嶺踏査」にみられるように支部の活性化をさらに推し進め、地域、地方に密着したクラブライフに尽力したい。自然保護活動の重視と、未知、未踏の頂を目指す学生登山を今後も継続実施していきたいという抱負が語られた。

最近の山岳会の活動に関して、筆者が簡単な説明を行なった。「日本山岳会百年史」や「中央分水嶺踏査報告書」の刊行、名誉会員でもある「ヒマヤン・ジャーナル」編集長ハリシユ・カパディア氏の来日と、彼からインド・ヒマラヤのカラースライド540カットの寄贈を受けたこと。栃木、茨城、千葉の首都圏に3つの支部が誕生したことなどを報告した。

続いて中央分水嶺委員会の福山美知子氏から、中央分水嶺踏査の解説があつた。山岳会の100周年記念事業の一環として実施された中央分水嶺踏査は、多くの支部委員会の協力を得て成功裏に終了



山岳担当記者を前に、映像でわかりやすく解説してくれた福山氏

しているが、その概要がスライドによって解説された。分水嶺の魅力や踏査の意義、踏査の困難さなどがわかりやすく話された。

その後、集客室に場所を移して簡単な軽食と飲み物による懇親会が開かれた。当日は参議院議員の選挙直前であり、しかも台風4号の接近のため、10人ほどのテレビ局、新聞、通信社の記者しか集まらなかったが、活発な意見の交換もあり、有意義な会となった。最後に成川隆顕常務理事から閉会の挨拶があり、散会となった。

(神長幹雄)

医療・海外・指導委員会

「高所登山における突然死を考える」開催

8月8日、四谷のプラザ・エフでシンポジウム「高所登山における突然死を考える」が、日本山岳会医療・海外・指導委員会、日本登山医学会、日本山岳ガイド協会の共催によって開催された。会場には183名が参加し盛況であつた。

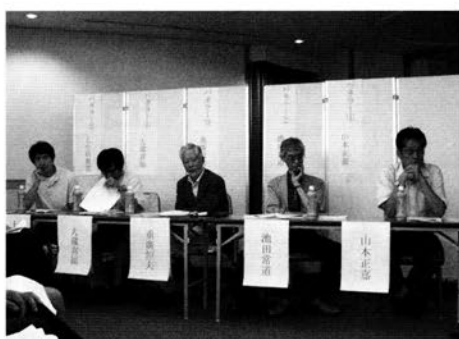
最初に増山茂氏が、本シンポジウムを開催するに至った契機は公募隊であるアドベンチャーガイド隊における5月のエヴェレスト登頂直後のI氏の突然死であると述べ、課題として、突然死と高山病死、大蔵隊の問題点、商業公募隊の問題点の3点を挙げた。

古野淳氏は公募隊の歴史と特徴を概説し、大蔵喜福氏へ質問を提示した。6500mのABCに9日間滞在したがBCでの休養が必要だったのではないかと、大蔵氏はガイドだったのかリーダーだったのか、I氏の状態、22時からの14時間行動は高齢者には無理なのではないかと、突然死におけるガイドの責任をどう考えるか などだつた。

大蔵氏は、出発から登頂まで32日間の速攻だったことが事前の順応活動を十分に行なったことや、I氏に直前まで異常がなかった経緯、自分がクライアントよりも先行した理由などについて説明した。

池田常道氏は、公募隊の主催者側は高所登山がガイド登山の概念からはずれたものであることを説明する必要があると指摘し、磯野剛太氏はガイドの立場からコメントした。谷口ケイ氏は、クライアントは自分に合った公募隊を責任を持って選ぶことと、リスクの認識の必要性を強調した。

山本正嘉氏は運動生理学の立場から検討を加えた。酸素をうまく使えばエヴェレストでも6000



パネラーとして話をされた、右から、山本、池田、重廣、大蔵、上小牧の各氏

昇台の登山と同じになること、1日あたりの運動量は意外に少ないことと、下山が手薄なのでBCへ戻ってくるまでの対策を講じる必要があることを指摘した。

ここで、増山茂氏が突然死についての知識を整理し、以後、医師による専門的な演題が3題続いた。上小牧憲寛氏は「60歳以上の人が高所登山をする場合には本人と周囲に相応の覚悟が必要であること」を明確に述べた。越智勝治氏は「南極における特異な不整脈の経験」、堀井昌子氏は「出発前にできることは何か」という点について、興味深い発表をした。

重廣恒夫氏は、8000^{メートル}峰のオーソドックスな戦術について、従来の負荷をかけながら順応していくタクティクスと、隊員資格について言及した。加藤慶信氏はガイドとしてクライアントの体調を細かくチェックし、ロープを常に結んで安全を確保して登った経験について発言した。

最後に高山守正氏のコメントとして、I氏の死因は不整脈死の可能性が高いが、事前の診断は難しい。高齢者のヒマラヤ登山には覚悟が必要」と、発表された。

本シンポジウムのテーマは、商業公募隊の特性という社会的なテーマと、高所での突然死という医学的なテーマの2点だった。両テーマとも内容的に重要な問題が多い上に、講演者が多い印象もあり、結論は出なかった。商業登山の隆盛の中で避けて通れない課題であり、問題提起をしたという意義は大きい。今後、十分な時間をかけて討議されることを期待したい。

(野口いづみ)

山研運営委員会内 ミニ水力発電小委員会

ミニ水力発電近況報告

昨シーズンは、7月下旬に上高



講師と熱心に意見交換する参加者(7月14日 山研にて)

地を襲った大雨の被害により、水源が使えなくなっており、11月の閉所まで運転停止を余儀なくされた。しかし、今年は4月の開所に合わせて、共同研究先の神奈川工科大学の学生らの協力により復旧作業が行なわれ、運転再開に漕ぎつけた。以下、近況を報告する。

技術的改善(負荷制御装置の設置)

山小屋での実用化を推進するため、バッテリーを過充電および過放電から保護しつつ、負荷(電気機器)をできるかぎり自由に使えるよう、マイコンを用いた制御装置を昨年度設置した。この制御装置は、ミニ水力の発電量と、3段階の優先順位をつけた負荷の消費電力量を常時読みとり、あらかじめ組まれたプログラムに沿って、バッテリーを保護しつつ、必要に応じて段階的に使用できる負荷を制限するものである。今年度から本格的に導入試験を行なっており、順調に稼働している。これにより、従来、計器類を見ながら負荷の使い方に気配りしていた管理人の負担がまったくなくなり、大雨時などの特殊な場合を除いて、メンテナンスフリーとなった。この制御装置は、奥多摩三條の湯や旧鹿沢

温泉でも導入、実用に供している。
見学者への対応

7月14日に、全国小水力発電推進協議会・長野県小水力発電推進協議会共催の見学会が実施された。当日は、台風之余波であいにくの天候となったが、県内外から大学、自治体、メーカー、農業関係者など多方面から37名が参加する盛況ぶり、小水力発電への関心の高さが窺えた(関連記事は『山と溪谷』10月号に掲載)。また、昨年からは、環境省職員の現地実務研修プログラムに山研のミニ水力発電が組み入れられ、今年も7月10日に15名が見学を訪れている。さらに、8月10日には、松本市小中学校の校長会53名が、「総合学習」の参考とするため見学に訪れている。

これら見学へは、山研管理人に对应してもらっている。ただし、事前に専門的な説明が希望される場合には、ミニ水力発電委員会の委員が現地に向いて対応している。JR車内誌への掲載

山研前管理人の木村太郎氏が代表を務めているNPG (National Park Guide) の紹介により、JR東日本の車内誌『トランヴェール』の取材を受けた。同誌8月号では

上高地特集を掲載しており、山研についてもインフォメーション付きで水車の写真と装置が紹介されている。

ミニ水力発電が注目を集めている背景には、環境とエネルギーが世界規模での課題となっているなかで、わが国でも今年度から小水力発電が新エネルギーに位置付けられたため、新たな設置には国からの補助金が交付されるようになったことがあげられる。山小屋だけでなく、今後いろいろなところでの実用化が期待できるだけに、山研のミニ水力はそのモデルとして注目を集めている。(柴山信夫)

三水区

韓国山行10周年を終えて

1998(平成10)年に始まった三水区韓国山行は、今年度10回目を迎えました。

この山行に延べ170人あまりの方が参加し、訪れた山々はほとんど韓国国土に及び、27座の登山を行ないました。美しく守られた自然、可憐な花々、各地方の史跡・歴史、伝統に培われた美味食材、手工芸、厚い人情に出会えた10回

の山旅でした。山の案内人は、山の鉄人・ソウル明智山岳会会長の金榮大氏、日本山岳会の乾能尚さんとはまるで親子のように親密なパートナー・実業家の高基昌氏、明智山のメンバーの方々です。上高地山研にも来所いただき親交を深めてきました。

第1回の雪岳山では、咲き誇るオオヤマレンゲと出会い大感激。帰路は雨の中を延々10時間余り歩き、びしょ濡れで寒さに震えま

した。金さん、高さんと「10回目にもう1度登りましょう」と約束した思い出深い山です。そして、10年目に訪れて驚いたのは、あの緑深く美しいスリンドン溪谷に映えた赤い大きな鉄橋が、度重なる水害で流され、その残骸を目の当たりにし、人間の造作では自然の力に争えないものと再確認しました。

第1回の山行のおり、北漢山の山小屋のマダムが、石田稔郎さんへの感謝の気持ちで用意してくださった昼食の料理が忘れられません。10回の山旅の中でも最高の美味でしたが、いろいろないきさつを伺って、国を越えた友情に感謝。深く心に残る出来事の一つです。

今回の雪岳山、北漢山ともに全

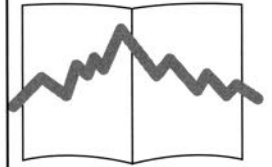
行程が天候に恵まれ、天からも祝福を受けているような豊かな気持ちになりました。10年間大きな事故もケガもなかったことに改めて感謝しつつ、現在は亡くなってしまった岳友に思いを馳せながら、打ち上げパーティで幕を閉じました。

乾・石田両先輩の山への崇敬の心がこの10回の山行につながり、参加させてもらえたことを心より感謝申しあげます。

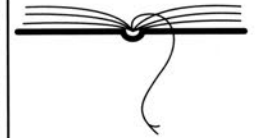
三水区の韓国山行は、一応今年で終了となりますが、このご縁を大切にしてまた韓国の人々に登りたいと思っています。たくさんの方の素晴らしい出会いをありがとうございます。(福原サチ子)



10回を数えた韓国山行、雪岳山山頂にて



図書紹介



松本徭夫・編著
辻和毅、渡部秀樹・著

『ヒマラヤの東 崗日嘎布山 群 踏査と探検史』



2007年4月 発行
権歌書房 818円
星雲社 8400円
A5判 定価

つい先頃、『幻の楼蘭、ロプ・ノールの謎』(2006年9月)を公開された松本徭夫さんは、息継ぐ暇もないように、同じ出版社から800ページを超える大作を上梓された。ただただ脱帽するのみである。崗日嘎布山群とはチベット東部、ヒマラヤの東端に位置し、それが標題となっている。日本山岳会福岡支部がそこに2001年から05年にかけて、毎年踏査隊を出した。その5回におよぶ成果をまとめたのが本書である。

第1部は自然・人文編で、崗日嘎布山群について、その地質学的生い立ち、植物、哺乳類、魚類、チベット仏教などをまとめる。その最後に山群への道(旅)と福岡支部の踏査報告が加わる。

第2部は探検史編で、主に東チベットに関わるものである。キリスト教宣教師、アッサム・インド東北部の探検、インド測量局とパシフィックの活躍、ベイリーやキングドン・ウオードなど、さらに近年の登山(ナムチャバルワなど)と探検(日本人によるものなど)にまで展開する。

すべてを読み通すには時間を要するが、東チベットの登山と探検の事典といってもよいであろう。図が96、表が39と、図表が豊富で親切だが、せっかくだから、目次にそのページを指示してほしかった。ほかに40ページのグーリア写真と8ページのカラー地図があり、本文に

白黒写真も多数入っていて、楽しいものになっている。

ただし、668ページのシェリフとラッドロウの写真は入れ違っているのか。また、538ページと560ページのセラップ・ギャツォはキントゥップと行動を共にしたことはないと思う。キントゥップを奴隷に売り飛ばしたという蒙古僧の名前をインド測量局は公表していない。

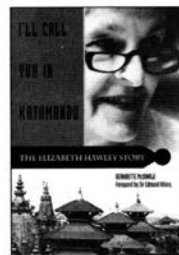
最後に、欧文の文献が年代順に並ぶが、検索しにくいから、著者のアルファベット順にした方がよかったと思う。雑誌、日文、中文や地図を加え、実に多数の文献が網羅され、これだけでもたいへんありがたい。

東チベットの探検史に一大金字塔を築いたといっても過言ではなからう。

(薬師義美)



BERNADETTE McDONALD・著
『I'll Call You in Kathmandu
The Elizabeth Hawley Story』



2005年
THE MOUNTAINEERS BOOKS
(Seattle) 刊
254頁
US \$24.95

本当にどうやって見張っているのか。

ネパールを訪れた登山隊はカトマンズに着いてホテルにチェック・インした直後に、あるいは下山してホテルでひと息ついた矢先、電話で面会を申し込まれる。そして的確な質問を投げかけてくるインタビューアこそ本書の主人公エリザベス・ホーリーさんだ。彼女が自らを語り、また母親への手紙から当時の様子を織り交ぜ綴った半生記、それが本書である。昨年、80歳をすぎた彼女に出会ったが、明快な彼女の記憶力には驚かされたものだ。

1923年シカゴに生まれ、ミシガン大学卒業後、ニューヨークにある『Fortune』誌に調査員として就職した。11年後、勤めをやめてヨーロッパ、アフリカ、中東、ア

アジアと余すところなく世界中を回った。そして1960年、雑誌『**ヨヨ**』のネパール政治情勢レポートとしてカトマンズに赴任した。歴代のネパール国王はじめ皇族関係者や政界人に知己を得、その後ロイター通信員として、この40年間、ネパール情勢の変動や反体制派の報道など業績を残した。

彼女がネパール入りした頃、ヒマラヤでは8000メートル級の初登頂時代は終わり、高峰バリエーション時代を迎えていた。63年にアメリカ隊のエヴェレスト西稜初登頂のニュースをスクープし、ヒマラヤの登山情報に関心を持ったという。登山界は少人数や単独での遠征が増え、国家的な登山隊から国際的な合同隊、国際商業公募隊と変化してきた。1山1隊の許可制も、今では一つの山にたくさんの隊が入山し、キャンプ場が大混雑するようになった。

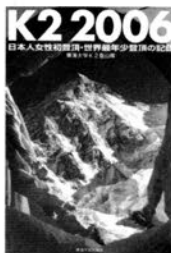
時代の流れを見つめてきた彼女は、ヒラリー卿やメスナーをはじめ多勢の登山者に支えられ、ネパール・ヒマラヤの登山クロニクルを作成した。04年、このクロニクルをアメリカ山岳会が「The Himalayan Database」(03年までの約

100年間、300峰に及ぶ4000の遠征隊記録、3万6000人の個人情報)として出版した。併読をお奨めしたい。

(南井英弘)

『K2 2006』

東海大学K2登山隊・編



2007年4月 東海大学出版会発行
B5判 127ページ
定価 3360円

2006年8月1日、東海大学K2登山隊は、K2登頂に成功した。K2は、世界でも登頂が難しいとされる山である。また、その登頂で、小松由佳隊員が日本人女性初登頂、青木達哉隊員が世界最年少という記録を達成した。その報告書が1冊の本になった。

前半にはK2の写真が載っており、山の美しさや厳しい地形を見ることが出来る。また山の厳しさだけでなく、パキスタンの風景やきれいな草花の写真もあり、和やかな様子もうかがえる。

後半には、行動や各種装備などの情報が掲載されている。8000メートル級の山に挑戦するには、こん

なにも様々な装備が必要なのかと驚かされた。これは、自分たちが挑戦する時に参考になるだろう。行動の記録では、K2への挑戦が本場に厳しい事であったことがうかがえる。当初3人でアタックする予定であったが、1人が体調不良になり、急遽2人だけでアタックを行なうことになった。下山では、8000メートルの高所でビバークをするなど、数々のハプニングが発生する。それにもかかわらず大きなケガもなく、2人は無事に生還することができた。生死を分ける場所での行動を綴った文章は、とても印象深く残っている。

また、隊の連携の素晴らしさを強く感じた。この隊から1人でも抜けたら、K2登頂は果たしてできたのだろうか。この隊だからこそ、K2を登れたのだろうか。そして、朝日スポーツ賞などの様々な賞を得ることができたのである。

この本は、私たち若者だけでなく、あらゆる人にいい刺激を与えらると思う。K2の壮大なスケールと登頂の話が、この1冊に収められている。

(栗山泰輔)

『GANさんが遡行(ゆく)北海道沢登り三昧』

岩村和彦・著



2007年6月 共同文化社刊
A5判 238ページ
定価 2100円

「沢登りをやってみよう」と思う登山者も多い。しかし沢に関するガイド本は少なく、読図力がなければ危険も伴うためか、沢登りをする登山者は限られていた。

新【ヒマラヤの山旅】【ニュージーランドの山旅】
【フロンティアの山旅】【日本の山旅】完成！
2007.10~2008.5



国土交通大臣登録旅行業第490号/財団法人日本旅行業協会正会員 総代理店
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

本書は昨年出版した『GANさんが週行(ゆく)北海道の沢登り』の第2弾。前著では「沢登りの面白さが伝わった」「楽しく読めた」「写真の臨場感がよかったね」などの感想が多く寄せられたという。今回はより多くの人に沢の魅力を伝えたいとのGANさんの強い思いから、初級者向けに、全26ルートを地図、写真とともに紹介する沢登り紀行である。

雪どけが待ちきれずに、沢の魅力にすっかりはまり、体力の衰えを技と気力で乗り越えて行くGANさん。次々現われるナメや、大滝やゴルジュ。沢の奥深くで息づく高山植物の美しさに心洗われるまさに知られざる北海道の秘境である。

GANさんの沢によせる様々な思いや、同行者とのたわいのない会話やエピソードが、ユーモアたっぷりに記載されていて楽しい。

GANさんは、山をいつまでも美しいままで楽しみたいと「山のトイレを考える会」の代表、「山の道を考える会」の事務局を務め、沢登りの合間に環境問題、登山道の整備にも取り組んでいる。本書には、沢登り愛好者が増え、夏山

の一種集中による問題が緩和・分散化され、環境問題にも役立てたという願いも込められている。

前著と合わせて週行した52ルートに、難易度を示し、読者の参考になるように工夫も凝らしている。沢登りの面白さが臨場感たっぷりで紹介されて、筆者も沢の魅力にはまったひとりである。改めて、百名山にない厳かな自然に感動を覚えた。

(樋口みな子)

多田亞生／関次和子・編

『水越武写真展 大地への想い』



2007年5月
東京都写真美術館発行
A4変型判 191頁
定価 2300円

水越武氏の40年以上にわたる作家活動の代表作を集めた作品展の図録。巻頭に作家自身が「地平線への夢」として、表現者としての取り組み姿勢を熱く語っている。

近藤信行氏「水越武さんの仕事」では、田淵行男氏との出会いと作

家としての心意気が語られ、杉本誠氏「自然へのパスポートをもった写真家」は水越少年の山との出会いから現在に至る表現活動と取り組みテーマの変遷が解説されている。

作品は展示順序に従って、テーマ別に3部に分けられている。200点のうち50点ちかくがモノクロームであるのも、水越ワールドを特徴づけている。

印刷は最新の高精度のもので、現実の作品にとっても近いカラーとトーンが再現されている。

関次和子氏の編集は行き届いていて、巻末の年譜、書誌は克明でよく整理されている。

なお、作品展は9月20日～10月8日、札幌市写真ライブラリーで巡回開催される。

(松澤節夫)



図書受入報告 (2007年8月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
村上直温	スケッチ画文集 風に乗ってII	95pp/23cm	双陽社	2007	著者寄贈
宮本数男	福井県の山(分県登山ガイド No.19)	119pp/21cm	山と溪谷社	2007	著者寄贈
信州大学伊那松本山岳部(編)	あした、タベの友は山 山は我らの姿なる(信州大学伊那松本山岳部報告No.2)	394pp/30cm	信州大学伊那松本山岳部	2007	発行者寄贈
在田一則 他	北海道大学の山小屋——山は厳父 小屋は慈母	83pp/30cm	北海道大学学務部	2006	発行者寄贈
邑田仁(監修)	富士山の植物図鑑	311pp/21cm	東京書籍	2007	出版社寄贈
George Band	Summit — 150 Years of the Alpine Club	256pp/29cm	Collins	2006	購入

平成19年度「海外登山基金助成登山計画」募集 海外登山基金委員会

日本山岳会は登山界の活性化を目指して優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

19回目となる今回も、困難を求めている挑戦、発想の新鮮さ、夢多い計画などユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

登山には多様なスタイルと発想があるはずで、ピークを目指すだけの登山ではなく、新しい課題に挑戦していく意欲も大切なことでしょう。

バイオニア精神にあふれるさまざまなジャンルの計画であれば歓迎したい、と考えます。会員資格や単独、パーティ等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成20年2月1日～平成21年1月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込締切 平成19年12月31日
- 審査と助成期間 平成20年1月中旬に審査、2月の理事会で決定、助成。
なお、対象となった登山隊は後日、必ず登山レポートの提出をお願いします。
- 助成金総額 85万円(平成18年度実績)
- 問合・申込先 日本山岳会事務局
電話 03-3261-4433

- 8月の理事会は夏休みのため休会でした。
- 各委員会の担当理事は以下のとおりです。
- 斎藤、太田理事＝集会委員会、山岳研究所運営委員会、海外委員会
- 山川、堀井理事＝自然保護委員会、科学委員会、医療委員会
- 相馬、古野理事＝指導委員会、青年部委員会、学生部指導委員会
- 岡部、石橋理事＝資料・映像委員会、図書管理委員会、図書委員会
- 藤井、成川理事＝英文ジャーナル、会報編集委員会、山岳編集委員会
- 宮崎、斎藤理事＝総務委員会
- 吉永、岡部理事＝財務委員会

ルーム目誌 8月

1日	学生部指導委員会	山岳地理クラブ
4日	三水会	
6日	自然保護委員会	
7日	図書委員会	
8日	山想倶楽部	休山会
10日	アルパインスキークラブ	アルパインスケッチクラブ
20日	総務委員会	アルパインスキークラブ
21日	山研運営委員会	インターネット小委員会
22日	麗山会	つくも会

23日	自然保護委員会	山遊会
24日	集会委員会	
28日	アルパインスキークラブ	緑爽会
29日	常務理事会	青年部
30日	海外委員会	

8月来室者 302名

会員異動(8月)

物故

高橋富貴夫(12481)	07・7・24
竹内佐郎(1697)	07・8・2
渡辺国治(7319)	07・8・10
石田稔郎(6065)	07・8・13
村上勝太郎(3049)	07・8・23
中堀登示光(13551)	
佐藤康夫(13289)	

退会

第25回図書交換会の出品図書募集について 図書委員会

08年3月に図書交換会を開催します。本棚に眠っている本、保管に困っている本をお寄せください。なお、出品図書リスト・頒布価格は会報「山」1月号とホームページに掲載予定です。多数の参加を期待しています。

●出品図書は10月末日までに、会員番号と電話連絡先を明記し



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪府中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代田区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

て「日本山岳会・図書委員会」宛にお送りください。雑誌類は原則としてお断わりします。

●頒布価格は図書委員会に一任ください。特に希望価格がある場合はご連絡ください。

●頒布が成立した場合は、価格の80%を出品者にお返しします。成立しなかった図書は、送料受取人払いでお返しすることになります(返送を希望されない場合は、その旨ご連絡ください)。

*問合せは、三好まき子まで
TEL 090-8019-8601
✉ hirata@hon-s.co.jp



インフォメーション

◆新入会員オリエンテーション開催のお知らせ

総務委員会

新入会員(会員番号が14327番以降の方)を対象としたオリエンテーションを開催します。今後、会員として充実した活動を行なうためにも、ぜひ、ご参加ください。該当会員には、案内書を郵送します。

日時 10月20日(土)13時30分より
場所 山岳会集會室

◆支部設立50周年記念祝賀会

熊本支部

支部設立50周年を迎え、記念祝賀会を開催します。

日時 11月17日(土)～18日(日)
場所 熊本交通センターホテル
日程 ■17日 記念式典(15時)
●記念講演Ⅱ重廣恒夫氏、
懇親会

懇親会

■18日 記念山行 小岱山
費用 1万2000円(懇親会、
宿泊)、5500円(懇親

会のみ)

申込 10月15日までに支部事務局
まで(〒860-0051 熊本市二本

木31318

FAX 096-324-1200

✉tanoue-tse@k3.dion.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります。

◆第17回山を語る「アルピニズムの源流」

図書委員会

マンメリーの自伝的名著『アルピニズム・コーカサス登攀記』の新訳が、9月下旬に刊行されます。

アルピニズムの開拓者、マンメリーが100年余り前に行なった数々の登攀と、その今日的意義について、翻訳者でクライマーの海津正彦氏が語ります。

日時 10月26日(金)19時より
場所 山岳会集會室

講師 海津正彦氏

問合 松澤節夫 TEL 042-623-5666

15666)

◆富士山をめぐる自然と文化の旅

緑爽会ほか

自然保護全国集會を支援するバスツアーを実施します。

日程 11月17日(土)～18日(日)
行程 ■17日 新宿西口発―西湖到着後集會全体会に参加

●組曲「三つの地球の歌」

●座談会「富士山と私」松

方峰雄／小佐野正史／

渡邊玉枝／近藤信行

■18日 ①石割山登山②忍

野周遊に分かれて行動

費用 1万9500円(バス代含)
定員 45名
詳細 近藤緑まで(FAX 03-339-510326)

◆中央構造線(伊那地区)巡検

山の自然学研究会

当研究会は02年から06年、伊那から四国までの断層露頭を巡検。

今回は、同構造線の出発点大鹿村を再訪。元地理調査所所長・佐藤

壮郎氏が特別参加される。

日時 11月2日(金)～3日(祝)
宿泊 鹿塩温泉「山景館」

定員 12名

費用 1万3600円(交通費別)
申込 10月15日までに、田中清介

宛(FAX 042-502-75

88)

*申込者に詳細を送ります。

◆雲取山山行 ゆきわり会

山稜シリーズの締めくくりとして、東京都の最高峰雲取山へ登る。

期日 10月26日(金)～27日(土)
行程 ■26日 西武池袋6時45分集合(7時特急乗車)

三峰神社―大ダワ―雲取小屋(泊)

■27日 雲取小屋―鴨沢―

奥多摩―立川(懇親会)

申込 ①山行のみ参加②山行と懇親会に参加のいずれかを

明記のうえ、9月30日までに皆川恵男宛(Tel & FAX 04-2373-3003)

2373-3003

✉minagawa_yasuo@ybh.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります。

◆スバル天文台とハワイ4島巡り

山の自然学研究会

山がどうして高くなったか。プレートテクトニクスを実感し、地球の構造的生きた活動を理解する

巡検旅行。日本が作ったスバル天文台も見学します。

日程 11月21日(水)～28日(水)
行程 成田発着(キラウエアキ

火口、マウナケア登頂、ス

バル天文台、ワイメア溪谷

バル天文台、ワイメア溪谷

●さんけん通信●

晴天続きの夏山シーズンでした

山研管理人 内野慎一

8月初め、山研は槍や穂高へ向かう方の利用が目立ちました。皆さんの「さあ行くぞ」という気持ちの高揚がびしびし伝わってきました。上高地を散策される方のゆったりと落ち着いた雰囲気とは一味違って、私たちに良い刺激でした。

山研では、早朝出発の方にはご飯とお味噌汁を朝4時頃から用意します。ご自身で焼き魚や納豆などを持参して、手早くしっかり朝食を食べて出発する方もいらっしゃいました。

槍穂縦走や槍ヶ岳往復などを行なう方の中には、山研に荷物を預け、山に入るパーティもありました。「今はどの辺りを歩いているだろうか」とか、「上はガスってきたけど天気が崩れなければいいな」などと、上高地から3000^{メートル}の稜線へ想いをめぐらせることができ、一緒に登山をしているような気分を味わうことができました。

携帯電話が普及し、どこにいても居場所や状況が分かる時代ですが、壁の地図を見ながら想像を膨らませ、山の天気を心配しつつ晴天を祈る……この心持ちには魅力を感じます。必ずしも祈りが天に届く

わけではありませんが……。

北海道から来られたパーティの方々の、槍から西穂への縦走がこの夏の最長かと思っていたところ、お盆の頃に愛知の方が一昼夜で立山から来られました。山岳レースの選考会とのことでしたが、さすがにこれは私の想像の範囲を超える行動で、本当に驚きました。

ところで、私たちは日頃から穂高の景色を楽しんでいますが、実際にはなかなか登る時間はありません。山へ向かう方をうらやましく見送りながら、稜線の山小屋で働いていたときの夏山の情景を思い出します。そして、充実感に満ちた日焼けした顔で下山された方から山の話聞き、元気を分けていただいています。

限られた休日に登山される方の中には上高地で宿泊する時間の余裕がない方もいらっしゃるでしょうが、山の帰りに立ち寄り、山行中の話など聞かせていただければ嬉しく思います。

今年の夏山は、台風の影響で一時天気が崩れたこともありましたが積乱雲をあまり見ることがなく、雨もほとんど降らず、暑い日が多いのが特徴でした。

この「さんけん通信」が届く頃、上高地ではそろそろ紅葉が始まります。その美しい景色は、今春設置したライブカメラで、山研運営委員会ホームページからご覧になれます。カツラの枝が画面に大きく映っています。皆さん、上高地の紅葉をどうぞお楽しみください。

など)

募集 22名(定員で締め切り)

費用 34万8000円

問合 船橋明まで(TEL)0467-323011

◆羽田栄治写真展「ネパール・ヒマラヤ今昔—山と人—」

作者の半世紀にわたるネパール・ヒマラヤの膨大なフィルムの中から、厳選した作品約45点を展示。作品は、変わらない自然と、変わっていく人々の対比ともいえる貴重なものとなっている。

会期 11月14日(水)～20日(火)

(10～18時、最終日は15時。

日曜、祝日は休館)

場所 コダックフォトサロン(東海堂銀座ビル3F TEL 03-3572-4411)

詳細は <http://www.kodak.co.jp>

■訂正とお詫び

8月(747)号、2ページ2段24行「三浦裕一」は「山口裕一」の誤りでした。4段1行「コピー」を「コピー一式とそのCD・ROM」に、3ページ3段13行「昭和32年だけは、総会報告も決算報告も」を「昭和33年度の収支決算報告の数字は」に訂正します。12ページ4段

30行「明治天皇行啓」は「明治天皇行幸」の誤りでした。14ページ3段26行「TEL 1020-298-956」は「TEL 0120-298-956」の誤りでした。以上、お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●最近には信じられないような遭難が目につきます。会員の遭難はあまりないようですが、山の安全を肝に銘じて山を楽しみたいものです。「登山客」ではなく、自立した登山者になるべく、巻頭の提言をお願いしました。

●この夏は何度か、北アルプス歩く機会に恵まれました。好天にも恵まれて、どこの山にもぎわっていました。やはり登山者が多いほうが夏山らしいですね。(神長幹雄)

日本山岳会報 山 748号

2007年(平成19年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社